

# TEXT

SUSCOM  
SUSTAINABILITY COMMUNICATION HUB CO., LTD.

2018 Automne

ヨーロッパから届く少し良い未来。  
かしこく、やさしいサステナブルライフマガジン

FREE Seasonal Magazine

ご自由に持ちください

Magazine trimestriel gratuit 01

特集

## まわり続ける パリのメリーゴーランド

サステナブルシティを訪ねて  
第2回 コペンハーゲン

### 北欧のパリに流れる知の時

彩りの隙間から、おとぎの国の真実を眺める

Life of Cafe

フリーアナウンサー

### 中村江里子

Sustainable Restaurant

### BIOBURGER

Albums de café de Paris

### Le Procope





TEXT

Trimestriel gratuit

Septembre 2018 numéro 01

Publication / Sustainability Communication Hub Co., Ltd. (SUSCOM)  
 6F Kagurazaka Fujii.bld 14 Tenjincho Shinjuku-ku Tokyo 162-0808 Japan  
 Tél : 03.35.13.08.30 Fax : 03.52.27.67.46  
 Rédaction : SUSCOM  
 Direction Artistique : Hiroshi Goto / Hi seisakushitsu Ltd.  
 Photos : Mika Inoue  
 Coordination : Megumi Terao  
 Textes : Takashi Goto | Chisato Furukawa | Atsuko Tanaka  
 Édition : Yukiko Murakami  
 Correction : Jean-Christophe Driot  
 Publicités / Annonces : Haruka Chiba / BONZOUR JAPON

TEXT01号

2018年8月25日発行

発行所:  
 株式会社サステナビリティ・コミュニケーション・ハブ TEXT事業部  
 〒162-0808  
 東京都新宿区天神町14 神楽坂藤井ビル6F  
 Tél : 03 3513 0830 Fax : 03 5227 6746  
 編集: SUSCOM 発行: 後藤卓  
 アートディレクション: ゴトウヒロシ(ハイ制作室)  
 営業: 千葉通香 E-mail: bonzour@hiltd.co.jp  
 印刷: 昭栄印刷株式会社

メリーゴーランドで涼風に会う。

ずっと気になっていたことの一つに、パリのメリーゴーランドがあります。  
 街角や公園で、意外とたくさんまわっていて、時には市庁舎前に突然現れて、消えたりもします。  
 小さくて古くて、どこかなつかしい公園のメリーゴーランドから、  
 エッフェル塔の下で華麗にまわる馬車たちまで、その姿は様々ですが、  
 乗っている子どもたちも、見守る大人も、一様にやさしく、幸せな表情をしています。  
 ジェットコースターのように弾けるような興奮はなく、  
 パレードのような浮きたつような躍動感もないのに、  
 数百年、まわり続けている理由の中に、本当に大切なことがあるような気がして。  
 真夏の陽射しについて、時空をまわるメリーゴーランドに乗れば、  
 私たちが忘れそうだった何かを見つけることができるのでしょうか？

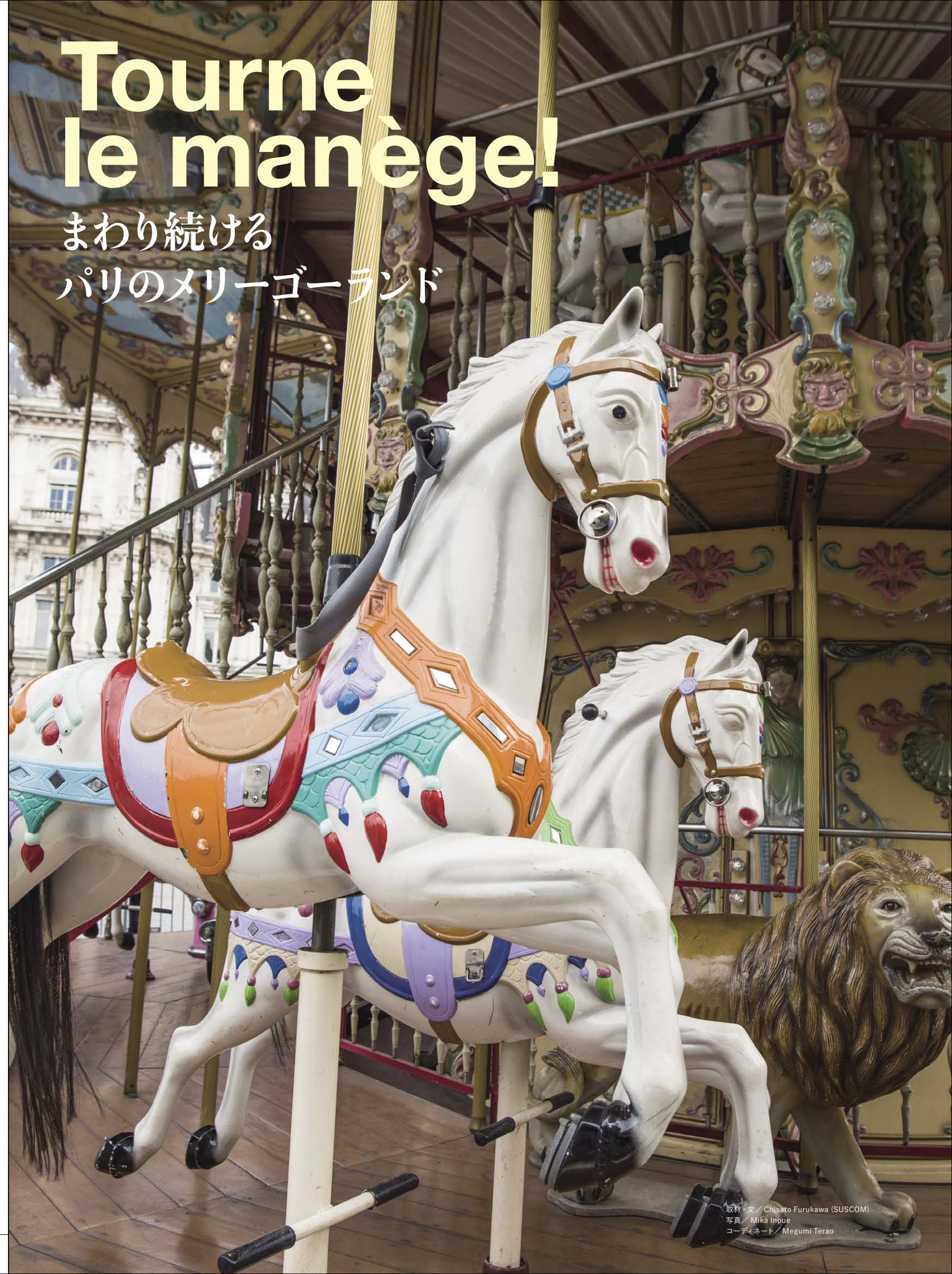
メリーゴーランドを降りたあとも、パリの歴史と文化そのものを紡ぐ世界最古のカフェや、  
 より良い地球の未来のために、100%ピオを目指したハンバーガーショップ、  
 そして、北欧コペンハーゲンへと、300年以上の時を超える旅が続きます。

暑すぎる夏の終わり、TEXTと一緒にメリーゴーランドに乗って、  
 また始まる毎日の風景に吹く涼風に会いにいきましょう。

2018年8月 TEXT編集部

# Tourne le manège!

## まわり続ける パリのメリーゴーランド



2018年に創立105周年を迎えました  
**アテネ・フランセ**

[www.athenee.jp](http://www.athenee.jp)  
 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-11  
 TEL 03-3291-3391 FAX 03-3291-3392  
 受付: 9:30~19:30 (土曜日は19時まで 日曜休校)  
 9月1日~9月7日と9月17日は休校です。

## 秋学期受付中

開始 9/21 (金) 終了 12/14 (金)

9月14日まで早期優遇割引あり

入門から最上級までの総合的なフランス語学校 (午前・午後・夜間) 全180クラス

**入門科**  
 初めてフランス語を学ぶ方のクラスです。  
**総合講座**  
 初級から最上級までフランス語のみによる授業。総合的な実力を身につける。  
**視聴覚クレディフ**  
 音声と映像を使用し、短期間で会話力・表現力を学ぶ。  
**視聴覚サンテイク**  
 会話、発音、文法、作文などの基礎を実践的に養成。  
 単科・仏検対策講座・通訳/翻訳講座など  
 入門から上級レベルまで専門分野のクラスが多数。

- \* 同時開講  
英語、古典ギリシャ語、  
ラテン語
- \* プライベートレッスン  
企業語学研修、随時受付

**アテネ・フランセ 専門学校** (2年制)  
 2019年4月入学生 フランス語学科募集

お問い合わせ  
 直通電話  
 03-6811-0977



## 街角で見かけるメリーゴーランド

パリにはメリーゴーランドが多い。遊園地など特別な場所ではなく、街中の普通の広場や公園の一角にさりげなく、あるいはランドマークとして設置されている。エッフェル塔の下にある二階建てのものや、市庁舎前に不定期に設置されるものは、ガイドブックに掲載されており観光客にも人気だ。ほかにもメトロの駅の出口前、地元の子どもたちが遊ぶ住宅街の公園など、パリの様々な景色の中にメリーゴーランドはある。豪華でピカピカとした電飾がまぶしいものから、素朴な木馬がぐるぐると回るだけのシンプルなものまで、スタイルも様々だ。メリーゴーランド、フランスではcarrousel（カルーゼル）ともmanège（マネージュ）とも呼ばれるこの遊具の歴史は古い。元々は中世の軍隊で騎兵の訓練用につくられたもので、それを遊具としたのは城に住む貴族・王族たちだった。かのマリー・アントワネットも、ヴェルサイユ宮殿に設置して楽しんだという逸話が残っている。一般庶民にまで親しまれるようになったのは、19世紀、移動遊園地など街中で催されるお祭りに取り入れられてからだ。当時、馬は貴族か軍人しか乗れない特別なものだったため、乗馬に憧れる大人たちが正装して乗り込んだという。今、メリーゴーランドは子どもたちのものだ。天気の良い日には、たくさんの子どもたちが近所の公園や、家族で出かけた繁華街の一角でメリーゴーランドに乗っている。彼らが成長し次第に足が遠ざかっても、自身が子どもを育てる年齢になればまた戻ってきて、今度は柵の外から見守る側になる。メリーゴーランドはパリの人々に、古き良き時代の華やかさと、幼い日々のノスタルジーを感じさせてくれるアイテムなのだ。



チュイルリー公園の常設メリーゴーランド。年中無休（10:30-20:00）。周囲にはほかにも子ども向けの遊び場があり、いつもたくさんの親子連れで賑わっている

# Manège de quartier

## Les manèges de Paris



### Hôtel de ville de Paris (ホテル・ドゥ・ヴィル・ドゥ・パリ)

パリ市庁舎前  
住所: Place de l'Hôtel de Ville 75004 Paris  
ネオ・ルネサンス様式の重厚な建物で知られる市庁舎前の広場に、不定期に登場する。クラシカルなスタイルのメリーゴーランド。夜にはライトアップされ、観光客にも人気



### le Jardin des Plantes de Paris (ル・ジャルダン・デ・プラント)

パリ植物園【Dodo Manège (ドッドゥ・マネージュ)】  
住所: 2 rue Buffon 75005 Paris  
国立自然史博物館に所属する植物園にある。生物多様性の大切さを伝えるため、馬ではなく絶滅種や絶滅危惧種の人形を回しているユニークなメリーゴーランド



### Le carrousel du Trocadéro (ル・カルーゼル・デュ・トロカデロ)

トロカデロ広場  
住所: 56 place du Trocadéro et du 11 Novembre 75116 Paris  
エッフェル塔とシャイヨー宮の間、セヌ川にかかるイェナ橋の袂にある。エッフェル塔とメリーゴーランドを並べた写真が撮れるため、人気の撮影スポット



### Le Jardin du Luxembourg (ル・ジャルダン・ドゥ・ルクサンブル)

リュクサンブル公園  
住所: Rue de Médicis - Rue de Vaugirard 75006 Paris  
パリ左岸にある、パリ市民の憩いの場。幾何学的なフランス式庭園で知られるが、子どもたちの遊び場としても人気。古い木製のメリーゴーランドのほかに、池では小型遊具でも遊べる

## Jeu de bagues

### 木の棒と鉄輪でできる騎兵ごっこ

パリのメリーゴーランドには、Jeu de bagues (ジュ・ドゥ・バグ) という定番の遊びがある。観光地の立派なメリーゴーランドではなく、街中の古く小さなメリーゴーランドで行うもので、木の棒と鉄の輪っかを使う。子ども向けの遊びだが、起源はメリーゴーランドがまだ騎兵の訓練用だった頃にまで遡る。仕組みは実に単純。木馬がぐるぐると回転している間に、手に持った棒で吊るされた鉄輪を引っ掛け取るだけ。たくさん取れても基本的に賞品などはないが、子どもたちは真剣な眼差しで棒を構え、鉄輪を狙う。その姿勢は、まさに騎兵さながらだ。すぐに要領をつかんでいくつもの鉄輪を取る子どももいれば、なかなかタイミングを合わせられない子どももいる。チャンスは最後の1周。回転がゆっくりになった時だ。見事に仕留められれば、ぜひ喝采を。もしもダメだった時は、次のチャレンジを見守ってあげよう。



(写真上) 古いJeu de baguesの絵。かつては着飾った大人たちのための遊戯だった(写真右下)木の棒を構える少年と鉄輪。鉄輪が板にセットされている場合、輪の半分ほどしか出していないため狙うのはとても難しい(写真下)木の棒と鉄輪







シャン・ドゥ・マルス公園内にある Manège1913。手動で回すタイプのレトロなメリーゴーランド。年中無休。秋冬 9:00-20:00 / 春夏 9:00-23:00 1回 2 €。15 回クーポン 15 € ※残念ながら、大人は乗ることができない。12 歳まで

## Manège1913と、とある家族の物語

### 古き良きフランスの名残をとどめる 小さなメリーゴーランド

エッフェル塔の足元から、南東へ向けて真っ直ぐに伸びる緑の芝生。パリ有数の緑地である Parc du Champ-de-Mars(パルク・ドゥ・シャン・ドゥ・マルス)だ。その中央付近、緑の木々に囲まれた涼しげな場所に、古めかしく可愛らしいメリーゴーランドがある。シンプルな鉄の骨組みと色とりどりの木馬、動力は手動、伝統的なスタイルの Jeu de bagues と、見本のようにメリーゴーランドのノスタルジックな要素が詰まっている。古めかしく見えるのも当然で、支柱に取り付けられたプレートによれば、創業は1913年。105年前のことだ。「僕の叔父が1950年にこのメリーゴーランド Manège1913を買って受けたんだ。僕も幼い頃はよく遊んだよ。けれど、叔父の晩年には放置されてポロポロになってしまっただけ。そのままなくしてしまうのは惜しかったから、修理をしてもう一度オープンさせたんだ。僕が21歳の時だよ」  
現在、Manège1913を運営しているレナート氏は、そうやって懐かしそうに笑った。フランス生まれのイタリア人。祖父の代で移民としてフランスにやってきたレナート氏は、一度はイタリアへ戻るが、学業を終

えた後再びフランスへ戻ってきた。「当時のイタリアにはまだ徴兵制があって、そこに行きたくなかったというのも、戻った理由の一つだよ。あとはやっぱりメリーゴーランドだね。子どもの頃に遊んだ楽しさと、古き良きフランスの雰囲気が忘れられなかったんだ」  
レナート氏は、今も時間があれば自分の手で Manège1913のハンドルをまわしている。目を輝かせて木の棒を受け取り、好きな木馬に颯爽とまたがる子どもたちを見ていると、彼が幼い頃に感じたであろう楽しさが、確かに今もこのメリーゴーランドに伝わっているのだということが、よくわかった。

### 変わる環境と受け継ぐ情熱

叔父が買い取ってから68年、自分で経営しはじめて25年。これからの Manège1913の運営について尋ねると、レナート氏は2つのことを語ってくれた。一つ目は、まだ実現できていないレナート氏の夢だ。Parc du Champ-de-Marsに200個のメリーゴーランドを設置して、1900年のパリが世界で一番きてきた時代の姿を再現すること。パリ市民のための盛大なお祭りを開催したいのだそうだ。Manège1913

### Parc du Champ-de-Mars シャン・ドゥ・マルス公園

住所：2 Allée Adrienne Lecouvreur 75007 Paris  
交通：メトロ 8 号線 École Militaire 駅  
公園の北西側にはエッフェル塔、南東側にはエコール・ミリテール(陸軍士官学校)が隣接する。1867年の第2回パリ万国博覧会以降、何度も国際博覧会が開催されている。公園の名称は、かつて同地に練兵場・開兵場があったことに由来する

はその中心として欠かせない。もう一つは、自分の子どもたちに Manège1913を継がせようとは考えていないということ。「今は、公園を散歩してメリーゴーランドに乗ること以外にも、たくさんの楽しみがある。メリーゴーランドは素晴らしい文化だけれど、政治的な援助がないと続けるのは難しいというのも実情だからね。子どもたちには、僕や叔父たちが受け継いできたメリーゴーランドへの情熱を伝えられれば良いと思っているよ」少々寂しい現実的な意見だが、実際、客層の変化は確実に訪れている。かつて、子どもたちは祖父母や両親に連れられてきていたが、今はベビーシッターとともにやってくる子どもが多い。「僕自身は、乗りに来てくれる子どもが一人でもいるうちは、とにかく続けていこう」とレナート氏いう。Manège1913に乗れるのは12歳までの子どもだけだが、エッフェル塔に登った後には、ぜひ Parc du Champ-de-Marsにも立ち寄ってほしい。きっと、100年前から変わらない子どもたちの無邪気な笑顔が見られるはずだ。なお、メリーゴーランドの隣でレナート氏が販売しているアイスクリームとクレープは、年齢制限なく誰でも購入できるので、大人にはそちらがおすすめだ。



Manège1913の隣にある売店。ここもレナート氏の運営。移民としてフランスにやってきた祖父は、アイスクリームとクレープの路上販売で成功をおさめた。売店は Manège1913 で遊びに来たお客さんへのサービスであり、祖父へのオマージュでもある



Renato DI CAMILLO レナート・ディ・カミーロ  
1993年に Manège1913 を買い取り、現在まで運営している。ウィットに富んだ販売人らしい性格は、祖父譲りとのこと。16 歳、14 歳、7 歳、4 歳の 4 人の子どもとの父親でもある

### マケットと手づくり木馬

Manège1913を運営していた叔父のほかにもう一人、レナート氏にはメリーゴーランドと深く関わる叔父がいる。ミニチュア模型(マケット)作家として有名な、ルシアン・ムシェ氏だ。「Manège1913の100周年記念イベントを開催した時に、叔父からマケットコレクションをすべて譲るといわれたんだ。その時は事情があって断つたんだけど、叔父の死後、コレクションがオークションに出されることをインターネットの告知で知ってね。慌てて会場へ行って、買い揃えてきたよ」と、レナート氏。自宅にあるアトリエには、今もたくさんのマケットコレクションが残っている。また、レナート氏がムシェ氏から受け継いだのは、コレクションだけではない。メリーゴーランドのマケットづくりの技術を教わり、それを木馬や看板づくりに活かしているのだ。アトリエの中には、つくりかけの木馬や修復中の木馬、ペンキ塗りの木馬などが、至るところに置かれていた。ペンキとニスでピカピカと輝く木馬は、きっとメリーゴーランドに乗りに来た子どもたちの笑顔も、輝かせてくれることだろう。



### Lucien MOUCHET ルシアン・ムシェ

1923-2016  
RATP(パリ交通公団)の整備修理工だったルシアンは、1946年から2006年までの間に多数のミニチュア作品を制作。妻ジョルジュット・ムシェが人形と衣裳、装飾を担当した。パリ郊外のブローニュの森で毎年開催される移動遊園地でデッサンをし、作品の資料としていた。2006年、Le musée des arts forains(ル・ミュゼ・デアール・フォーラン/緑日博物館)で彼のコレクションの展覧会が開かれた



## Parc de Sceaux

レナート氏は、Manège1913以外にもメリーゴーランドを運営している。Parc de Sceaux(パルク・ドゥ・ソー)の一角に設置したものは、1870年頃の製造。しっかりと子どもたちが遊べる状態に修復しており、もちろん Jeu de bagues もできる。当初は、ヴェルサイユ宮殿に設置したいと行政機関へ提案したところ、残念ながら却下され、代わりに Parc de Sceaux ならば OK と許可が降りたそうだ。



### Parc de sceaux ソー公園

住所：60, Av. du général de Gaulle 92160 Antony

100本以上の桜が植樹されていることで知られる公園。春には花見スポットとして人気。日本式の、芝生の上にレジャーシートを敷く花見スタイルを楽しめる



(写真左上) アトリエで、自作の木馬にニスを塗るスタッフ(写真上)ムシェ氏の作品。メリーゴーランドのマケット(写真下)アトリエ内には、つくりかけの木馬や修復中の木馬がたくさん保管されている







移動遊園地のシンボル、観覧車と回転ブランコ

## Fête foraine des Tuileries

**Jardin des Tuileries** (ジャルダン・デ・チュイルリー)  
 チュイルリー公園  
 住所: 113 rue de Rivoli, 75001 Paris  
 交通: メトロ1号線 Tuileries 駅

### チュイルリー公園の移動遊園地

夏になると、パリの人口が減る。なぜなら、皆、ヴァカンスに出かけてしまうから。

これはフランスのヴァカンス文化を表現するものとしてよく耳にする文句だが、逆に、夏のパリだからこそ楽しめるものもある。華やかな移動遊園地 Fête foraine des Tuileries (フェット・フォレンヌ・デ・チュイルリー)だ。毎年、6月末から8月末までの約2カ月間、チュイルリー公園に出現する。

この移動遊園地にもすてきなメリーゴーランドが複数登場し、幅広い来場者を楽しませている。さらにジェットコースターやトランポリンなど、設置されるアトラクションの数は約60個。屋台には綿菓子やワッフル、りんご飴など、カラフルな軽食が並ぶ。浮かれ賑わう雰囲気は、まさに庶民の夏祭りだ。ちなみに、夏以外の季節に移動遊園地を楽しみたい場合は、3月末から5月末にパリ東部のヴァンセンヌの森で開催される Foire du Trône (フォワール・デュ・トロヌ) へ。フランス最大規模を誇り、10ヘクタールの敷地に約350個のアトラクションが並ぶ。西暦957年に西フランク王国のロタール国王の勅令で始まったという、歴史ある移動遊園地だ。



移動遊園地のメリーゴーランド



綿菓子などを販売する売店。派手な色使いの屋台



## Le musée des arts forains



(写真上) 1900年代に製作されたメリーゴーランド。ドイツ製の木馬とフランス製の木馬の2種類が設置されている(写真左下) 自転車のメリーゴーランド。1897年にベルギーで製作されたが、機械はイギリス製。もともとは電動機と蒸気で動いていたが、現在は自転車漕ぐ人力で回っている(写真右下) ギャルソン競争ゲームの遊び方を説明中

### 夕暮れ時の縁日へタイムスリップ

メリーゴーランドや移動遊園地に興味を持った方に、ぜひ訪れてもらいたい博物館がある。パリ12区ベルシー地区にある Le musée des arts forains (ル・ミュゼ・デザール・フォラン)。日本語では「縁日博物館」と訳される、19・20世紀に流行した屋外遊具を収集・展示する博物館だ。収集品だけでなく展示スタイルもユニークで、少人数のグループごとにガイドがつきその案内に従って移動するのだが、見るだけでなく実際に触れ、乗って遊ぶことができる。ガイドたちの案内も巧みだ。軽妙な語り口と大げな仕草が様になっており、舞台俳優が多いというのも納得できる。夕闇を連想させる薄暗い館内に浮かび上がる、奇怪な

オブジェやレトロな遊具の妖しさとも相まって、来館者たちはまるで当時の縁日にタイムスリップしたかのように感じるだろう。聞けば、来館者は子どもよりも大人の方が多いそうだ。大人たちは遊具で夢中になって遊び、はしゃぎ、そして「子どもの頃の無邪気な気持ちになって、とてもうれしかった」と笑って出口へと向かう。「縁日博物館」には、大人を子どもに戻すノスタルジーが詰まっているのだ。

#### Le musée des arts forains

住所: 53 Avenue des Terroirs de France, 75012 Paris  
 交通: メトロ14番線 Cour St-Émilion 駅  
 Tél: 01.43.40.16.22  
 料金: 大人16€, 小人(11歳まで)8€, 4歳未満は無料  
 定休: 水、土、日曜日、夏休み期間中は毎日営業  
 ツアー所要時間: 1時間30分 ツアー催行時刻: 11:30 / 14:30  
 ※事前予約が必要。Webサイトまたは電話から。  
[arts-forains.com/](http://arts-forains.com/)

**Béatrice LASSUS**  
 ベアトリス・ラスー  
 広報・マーケティング担当

「戦争の記憶を残しておく博物館はたくさんあるのに、古き良き時代の娯楽や楽しさを伝える博物館がないのはおかしい。」そんな思いから、Le musée des arts forains はオープンしました。ここに収集・展示してある品々は、俳優であり演出家であり、アンティーク商人でもあったジャン・ポール・ファヴァン氏のコレクションです。興行師が廃業する際に買い取るなどして集めたもので、現在では完全な形で残っているのは非常に珍しい、貴重なものばかりです」



(写真上) 元ワイン倉庫の博物館外観  
 (写真下) 博物館入口。真っ赤な屋根が印象的





# Sustainable Restaurant

地球にも、人にもおいしいレストラン



メニューは11.70 €から提案。高品質のバーガーショップの間ではリーズナブル



水および塩は農産物ではないのでバイオであることを証明することができない。単にこれらの製品の認定がないので、99.9%バイオだと表記されている



## BIOBURGER

住所：10 rue de la Victoire 75009 Paris  
Tel：09 81 81 88 33  
交通：メトロ7号線 Le Peletier 駅  
定休日：無休  
営業時間：11:45-22:30  
<https://www.bioburger.fr/>

### ハンバーガーで有機農業を進める

BIOBURGER(ピオバーガー)はフランスで唯一の100%ピオのファーストフード店だ。ビジネススクールでともに学んでいた、アンソニー・ダレとルイ・フランクが、在学中の2007年、ファーストフードのあり方を変え、幅広く愛されているハンバーガーを通して、有機農業を浸透させていくことを目指し、立ち上げた。「水と塩以外、原材料は100%ピオで、しかも新鮮な素材のみを使っています。肉は、フランス産オーガニック牛肉100%、ゴーダチーズはイェンヌ県の小さなファーム、チェダーチーズはイギリスのチェダー村のものを使用。また、ベジタリアンのお客さまにはトーフを使ったものを用意しています。ドリンクもすべてオリジナルで、濾過水とピオのフルーツからつくられたシロップ、ピオさとうきびからできたシュガーでつくられており、ベジタリアンの方でも安心。もちろん、おいしさが一番大事なので、プリオッシュパンは、注文が入ってからトーストする前に切り、ジューシーなハンバーガーの味を引き立てるように細心の注意を払っています」

BIOBURGERのすべてのショップは、認定機関によってピオ公認されており、商品の100%がピオ。土壌、生態系や人びとの健康を維持するために、より良い環境を保證する生産方法を取り入れてつくられる良い食材だけを利用している。

「生産者の顔が見えることが大切です。たとえば、肉はフランス西部の有機飼育の協同組合から、ジャガイモはノール・パドゥ・カレ、ピカルディ地方の130の有機生産者の協同組合から仕入れています。そしてこれからは、自分たちが食べるものだけに目を向けるだけでなく、環境と一緒に考えて変えていくために、お客さまに参加型のゴミ分別をお願いしています。将来は、ゴミを堆肥肥料として使えるようにしたいし、ボトル入りの水もやめたい」 BIOBURGERは、自分たちが口に入れる食物を「変えたい」を想うすべての人たちのためのものだと、彼らはいう。このハンバーガーをほおばればきっと、ピオの未来が見えてくる。



2018年9月にはパリのデファンス地区に主要店をオープン予定、2022年までにフランス全土に30数店舗（直営およびフランチャイズ）を目標としている

# Life of Café



## Eriko BARTHES

フリーアナウンサー  
中村江里子

気に入ったカフェを見つけて、テラスでおいしいパンと一緒にすてきな器でカフェオレを楽しむ。そんな時間を探して、彼女はパリにきた。とても幸せな日々。重ねた充実の時。そして、今、彼女にとってコーヒーはもっと、生活の中でしっかりとあるものになった。日々、新しい幸福のフレームにただようコーヒーの香りが、物語っている。





家事や仕事、子育てに忙しからこそ、一日を多く過ごすリビングやキッチンで、自分好みのおいしいコーヒーをいれて飲むことが幸せだと語る江里子さん

## 初めてのコーヒーは、サイフォンの音とともに

パリ市内にある中庭の美しいマンションにエリコ・バルトさんを訪ねる。1990年代から2000年にかけて、テレビが輝いていた時代をアナウンサーとして駆け抜け、結婚を機にパリへと活躍の場を移し、今なお私たちの憧れであり続ける中村江里子さん。呼び鈴を鳴らすと、変わらない江里子さんのよく通る品の良い声。そして、同時に響く子どもたちが江里子さんを呼ぶ声。2つの音がやわらかく混じり合いながら、すてきな日常へと、招き入れてくれる。玄関から、廊下を抜け、キッチンへ。レトロな日本のポスターや看板に思わず心がゆるむ。そして、品の良いオレンジを基調とした空間。シンクの壁にはトリコロールのタイルを背景に、いかにも機能的な調理器具が

整然と並んでいる。何気ない時間が正しく積み重ねられると、とてもスタイリッシュになるのだ。江里子さんがコーヒーを飲むのは、今はキッチンがほとんどだという。女性として、妻として、3人の子の母として過ごす、忙しい毎日。マグカップにたっぷりのカフェオレが日々のエネルギー源だと、あの頃とあまり変わらない、透き通るような笑顔で話してくれた。「初めてコーヒーをいただいたのは小学5年生か6年生の頃。勉強を教えてくださいださる先生の家でした。レッスンが終わる頃に母が迎えに来るのですが、先生ご夫妻がコーヒー好きで、必ずサイフォンで入れたコーヒーとお茶菓子を振る舞ってくれました。

すごく本格的で、子どもにはとても苦く感じたのですが、たくさんミルクとお砂糖を入れ、ミルクコーヒーのようにしていただいたというのが、初めての経験ですね。だからコーヒーのイメージは、ポコポコポコと、サイフォンで時間をかけて、良い香りを待ちながら、いただくものかな」勉強が終わるのは夜の9時頃。おやつと一緒にいただくミルクたっぷりのコーヒーが、10歳の女の子にとってどれだけ魅力的だったことだろう。このミルクコーヒーの甘い記憶が影響したのか、大人になった江里子さんは、カフェオレに強く惹かれるようになる。そしてカフェオレの香りは、やがて、江里子さんの人生に大きな影響を与えることになる。

## 美術館でも買い物でも三ツ星レストランでもなく カフェオレとクロワッサンを求めてパリへ

「その後しばらくはコーヒーに縁がなかったのですが、社会人になってから、なぜかすごくカフェオレが好きになっていました。仕事の合間はもちろん、控室に何か飲み物をご用意しますかと聞かれると、必ずカフェオレをリクエストする。プライベートでも、どこのお店に行ってもカフェオレ。ある時友人から、そんなにカフェオレとパンが好きなんだからフランスに行けば良いじゃないといわれ、夏休みにカフェオレとおいしいパンを求めて、初めてパリに行きました。そうか、カフェオレというのは日本の飲み物ではなかったんだと。だから本場を訪ねてみたいなり、美術館でも買い物でも三ツ星レストランでもなく、カフェオレとクロワッサンを求めてパリに来

たんです」カフェオレとクロワッサンをめぐる冒険。そして、パリを訪れ、本場のカフェオレに出会い、さらに新鮮な衝撃に出会う。「最初の旅はカフェとパン屋さんめぐりをしました。そして、カフェオレなのにこんなに苦いんだとびっくり。当時の日本のカフェオレは、アメリカンコーヒーに牛乳が入っているものが多くて、まろやかだった気がする。やはり、日本にはまだカフェ文化もなかったし、こちらはエスプレッソ系がベースなので、濃くてしっかりしている。最初はおいしいというよりはすごく苦みが強くてあれっと思ったのですが、結局そうやって旅をして、パリで本当のカフェを



社会人になってから大好きになったカフェオレ。カフェで飲むだけでなく、今では自宅のコーヒーマシンでいれて、毎日楽しんでいる

ぐって行くうちに、これがカフェオレなんだと学びながら、どんどんおいしく感じるようになりました」カフェめぐりを経て、さらにパリを惹かれるようになった江里子さんがここに住み始めたのは17~18年前ぐらいのこと。それから、3人の子どもに恵まれ、自分のペースで仕事をし、何より、バルトさんの陽気な声に囲まれる日々。そんな毎日が、パリへの憧れや輝きを、少し違う色に 시작했다。憧れていたものが身近にあり続ける幸せ。おいしいカフェオレはいつもそばにあるし、クロワッサンだって食べ放題。カフェもいたるところにある。それこそ Café de Flore (カフェ・ドゥ・フロール) のような、ちょっと背筋を伸ばして行きたくなるカフェから、散歩の途中にふらりと立ち寄りたような、あたたかくて、やさしいカフェもたくさんある。当時は、今よりももっと、あちこちに古い町のカフェがあって、少しくらい汚くても、やっぱりちょっと家にいる時とは違う感覚で楽しめて、とても嬉しかったですね。その頃はまだファクスで原稿を送っていたので、カフェでずっと原稿を書いて、ファクスで送ったりとか、インタビューを受けたりとか。私にとってカフェは、本当に息抜きの場所だったり、仕事の場所だったりしたんです。もともとそんなにいろんなところに出かけるタイプではないので、近所のカフェに行くことが最高の贅沢で、幸せな時間でしたね」





## 普通の暮らしで見つけた、 コーヒーを楽しむ時間

「子育てが忙しかったりしたこともあって、飲まない時期があったのですが、JURA（ユーラ）のコーヒーマシンを買ってからは、家で毎日いただいています。もともと、少し前に友人の家で見て、すごくデザインがきれいだし、しかもおいしいので憧れていたのですが、少し値段が高かったので躊躇していたんです。でも、昨年、自分にご褒美！というタイミングで思い切って購入しました。私は、外に出るのがあまり好きじゃないし、カフェにもさすがに慣れたからなのか、コーヒーを飲む機会がすごく減っていたんですけど、JURAを入れてから変わりましたね。音と香りが、またコーヒーに対する思いを掻き立ててくれたというか。今、ここで挽いているんだという実感。結構な大きな音ですが、すごく嬉しくて。私は、家事もやるし、家で仕事もしますので、キッチンやリビングで過ごす時間が本当に大切なんです。味も、本当に細かく自分の好きなように調整できるので、お気に入りの豆に合わせて、その日の気分でも調整できるのが、今の私にはとても魅力です。カフェも良いのですが、今日は薄めて飲みたいんだけど薄めにしてというわけにもいかないし。だから、私の楽しみは、豆を買う時から始まるんです。コーヒー屋さんに行って、どうしよう、どの豆がいいかな。すると『マダム、挽きますか』『いいえ豆のままです！』『マシンは何を使っていらっしゃるんですか』『JURAです』。そこから話が広がって、主人は濃く飲みたい、私は絶対にミルクと一緒に飲む、どんな豆が良いかという会話が本当に楽しくて」そんな江里子さんが手にしているマグカップは、お子さんが母の日にプレゼントしてくれたという、大き



くて、たっぷりのカフェオレが入りそうなマグカップ。子どもたちは、江里子さんの一番幸せそうな表情を、毎日の暮らしの中できちんと見つけていたのだ。普通の暮らしの中で、一番幸せな時間を紡ぐ一杯のカフェオレの甘い香りが、今日もキッチンをそとと満たしている。

オレンジとブラックが基調色のキッチンによく似合っている、スタイリッシュな JURA 社のコーヒーマシン。簡単なボタン操作で、コーヒー一杯を豆から挽いていれることができ、豆の挽き方も調整可能だから、その日に飲みたいコーヒーの味が楽しめる。下の写真は、子どもたちからプレゼントされた江里子さん愛用のマグカップ



### Eriko BARTHES

エリコ・バルト

1969年東京生まれ。フジテレビのアナウンサーを経て、フリーアナウンサーに。2001年にシャルル・エドワード・バルト氏（化粧品会社経営）と結婚し、生活の拠点をパリに移す。現在は13歳、11歳、7歳の3人の子どもの母親で、パリと東京を往復しながら、テレビや雑誌、執筆などで幅広く活躍中。著書も多数



E6 GOOD DESIGN

パリスト品質を実現する  
全自動コーヒーマシンの最高峰

いつでも期待どおりのパリスト品質を実現する「E6」。その秘密は、世界で唯一、JURA だけに搭載されたブルーイングプロセスにあります。また人間工学を取り入れた操作性で、お好みのコーヒーの抽出はもちろん、使用後のメンテナンスも簡単かつパーフェクトに行います。



**JURA (ユーラ) の魅力を  
体験してみませんか？  
常時試飲受付中です！**

- ブルーマチックジャパン横浜本社ショールーム
  - 代々木ショールーム（東京都渋谷区）
  - 銀座ショールーム（東京都中央区）
  - ブルーマチックジャパン大阪営業所ショールーム
  - ブルーマチックジャパン福岡営業所ショールーム
- ※10時～17時（土日祝日除く）、要予約

詳細は「JURAスペシャルサイト」へ  
[www.brewmatic.co.jp/JURA/](http://www.brewmatic.co.jp/JURA/)

●電源・消費電力・電流：100V・1250W・12.5A ●サイズ：幅280×奥行439×高さ351mm ●重量：約10kg ●電源コード長さ：1.1m  
●カラー：ピアノブラック ●機能：全自動式、豆・粉量対応 ●付属品：マシンクリーナー、クリリススマートフィルター、ミルクチューブクリーナー



## Albums de café de Paris

Le Procope(ル・プロコップ)は、1686年、イタリア・シシリア出身のフランチェスコ・プロコピオによって創業され、当時としては珍しかったコーヒーやシャベットなどが味わえる、まさに、世界最古のカフェです。Le Procopeが、単なるカフェにとどまらない存在になったのは、1689年、カフェの向いに、劇場Comédie-Française(コメディ・フランセーズ)ができたことから。ここでよく作品を書いていたモリエールなどの作家はもちろん、次に、政治家、音楽家、芸術家、文化人、著名人たちが集まって情報交換の場になり、やがては、国政を左右する議論の場になっていきました。すなわち、初めてのカフェということだけでなく、ガストロノミーの世界においても、政治、文学、芸術、全般において、フランスの歴史がここから始まったといっても過言ではありません。Le Procopeの常連には、「すべての道はローマに通ず」という有名な言葉を残した17世紀の詩人、ジャン・ドゥ・フォンテーヌをはじめ、ジョルジュ・サンド、ラファイエット将軍、ジャン＝ジャック・ルソー、ヴォルテール、ショパン、マーラーなど名だたる人物たちが名を連ねています。フランクリン・ルーズベルトは、このカフェでアメリカ合衆国憲法の一部分を書いたといわれていますし、革命後に政権を握ったかのナポレオンも代金の代わりに自分の帽子を置いていきました。この帽子は今も店に飾ってあります。そして、いくつかの部屋には、それぞれ著名人の名がつけられており、店内には、彼らが

使った机や肖像画などが飾られていて、美術館さながらです。

### 300年のタイムトリップへ

このカフェの最大の魅力は、まるで300年の時間を旅するかのような感覚を味わえること。本棚、石の床、絨毯、壁紙などは、手入れはされていますが当時のままですし、備えつけの椅子も布を張り替えはしましたが300年前に使っていたものです。3階まですべての店内をあたためる暖炉やヴォルテールのデスクなども、オブジェとして残されていて、自分が今、どの時代を生きているのかが曖昧になることさえあります。店内のトイレの表示は、Homme(男)とFemme(女)ではなく、中世フランス語で市民と言う意味のCitoyen(男)とCitoyenne(女)と当時の表記が使用されています。そして、壁紙には、Liberté(リベルテ:自由)、Égalité(エガリテ:平等)の文字。フランス革命の起源をなす「自由、平等、友愛」は、フランス共和国の標語ですが、壁紙に書いてあるのは、「自由」と「平等」のみ。時代を映す鏡のような場所だったので。

### 次の世紀へ、文化の架け橋として、

Le Procopeは、今、レストランとしても高い評価を得、一日600人ほどのお客さまを迎えています。歴史を感じてもらいつつ、おいしい食事とプロフェッショナル



## Le Procope

1686年創業。文学、芸術、政治などを志す著名人が集う伝説的なカフェで、かのナポレオンも訪れたという。自家製アイスクリーム、シャベットが自慢で、数百年、変わらないレシピで今も提供されている  
住所：13 rue de l'Ancienne Comédie 75006 Paris  
Tel: 01 40 46 79 00  
交通：メトロ4・10番線 Odéon 駅、メトロ10番線 Mabillon 駅  
定休日：無休  
営業時間：12:00-24:00 (木～土曜日は1:00am)  
<https://www.procope.com/>



なサービスを、サンジェルマンデプレという界隈でも最もパリの場所を楽しんでいただけます。300年変わらないレシピで提供されるアイスクリームはもとより、フランスの代表的なメニュー、coq au vin(コック・オ・ヴァン：鶏肉のワイン煮)を熱いまま提供できるよう、お客さまの前で鍋からお皿にサービスする方法もこの店が発祥。かつては上流階級の人々の社交場だったLe Procopeも、現在は、よりポピュラーに、気軽に利用できるレストラン、サロン・ドゥ・テに進化しました。サロン・ドゥ・テでは、カフェは1杯2.80€。この価格で300年の歴史を感じられるのは幸いです。300年前のオリジナルのオブジェをただ飾るだけでなくパリの歴史を伝えていくのも、私たちの仕事です。机上の歴史でなく、五感で伝えていく、それができるこのカフェで働くことは、私たちの何よりの誇りなのです。



ディレクター  
Eric GIROUD-TROUILLET エリック・ジルー トゥルイエ



# サステナブルシティを訪ねて

## 第2回

### コペンハーゲン

写真 Miho Hosoya (SUSCOM)



# Copenhagen

## 北欧のパリに流れる知の時

### 彩りの隙間から、おとぎの国の真実を眺める

地球儀をまわして北欧を目指す、北海をまわりこむ半島の東端にあるデンマークの首都、コペンハーゲンに着く。デンマーク語で「商人の港」。歴史の中で、たび重なる戦火に見舞われたが、ローゼンボロ宮殿やラウンドタワーなど16~17世紀にかけて建設された中世の建物が今も残り、華麗な佇まいのまま、あり続けている。

### 175年、 笑顔をつなぎ続ける公園から



北欧の玄関口、カストラップ国際空港から国鉄に乗って15分たらず、あっという間にコペンハーゲン中央駅につく。1911年にオープンした重厚な駅舎。レンガのアーチと高い天井、シャンデリアのような明かりが、

とても控えめに歓迎してくれている。ふと気がつくと、自転車に乗った女の子と犬が構内に滑り込んで行く。駅舎全体がバリアフリーになっているので、車椅子やベビーカーはもちろん、自転車でもホームまで行くことができる。さすがデンマーク。ペットも自転車と一緒にアウトリップを満喫だ。  
コペンハーゲン中央駅といえば、チボリ公園。1843年のオープン以来175年、アンデルセンも遊び、ウォルト・ディズニーも参考にしたといわれる遊園地の中の遊園地。時のデンマーク国王クリスチャン8世の命により、市民のための娯楽施設として開園したのだが、「階級の差別がなく、誰でも楽しめる場所」という、当時としてはとても先進的なコンセプトには、反発も強かったという。でも、つくってくれて本当に良かった。公園を歩いてみれば、わかる。公園中を、175年前と同じ笑顔が満ちている。

少しお腹がすいたので、チボリ公園内最古のレストランGroften（グロフトン）に寄って、デンマークの伝統料理、スモブローと、地元ビールのカールスバーグを注文する。スモブローとは「スモ：バター、ブロー：パン」という意味で、薄切りのパンにたっぷりバターを塗り、そしてその上に新鮮な魚介類やチーズ、ハム類、野菜類などをのせたオープンサンドだ。そして、なんとこれもカールスバーグ。きめ細かい3cmの泡に守られた黄金の恵みを旅の始まりにしてみる。ふと視線を上げると、通りの向こうにはアンデルセンというパン屋さん。そう、日本が誇るアンデルセン。もともとデンマークのデニッシュベストリーのおいしさに感動して始めたそうだが、今はデンマーク人が、日本のパン職人がつくるデニッシュを買いに訪れている。少し不思議な感じがして、知らず知らず笑顔になった。



### 世界最古、 最長の歩行者天国の向こうにあるもの

街の中心は市庁舎前広場だ。1905年に完成した赤煉瓦づくりの6代目。コペンハーゲンで一番高い建物だから、すぐわかる。デンマーク様式と北イタリアのルネッサンス様式を取り入れた威風堂々たる建物。市庁舎入り口の右側には、世界の時刻と天体の動きがわかるイエンス・オルセンの天文時計が、300年間に0.4秒しか誤差が生じないという想像を絶する精巧さで時を刻み続けている。ここから、世界最古、最古の歩行者天国ストロイエが始まる。入口にもなっている広場には、名物のホットドックの屋台がいくつも並んでいる。フランスパンの真ん中に穴を開け、たっぷりのケチャップとマスタード、パンから飛び出すほどのウインナー。これもまた北欧デザインなのだろうか。ストロイエは、ここから、コンゲンス・ニュートーウ「王様の新しい広場」までつながるのだが、デンマーク語で歩くという意味だということで、とにかく歩いてみることにする。道路の両脇にはたくさんのショップやバー、レストランが立ち並び、小さなお土産屋からデンマークを代表するデザイン雑貨店やブランドショップまで実に様々だ。まず、デンマークが誇る食器メーカー ROYAL

COPENHAGEN（ロイヤル・コペンハーゲン）本店に寄る。1775年創業、欧州最古の王国、デンマーク王室御用達。日本の古伊万里染付に影響を受けたといわれるコバルトブルーの絵柄はすべて手描きで、アーティストのサインとシェパナンバーが刻まれている。中でも、デンマーク人にとって特別なのが、1868年から制作されている下絵の手描きのブルーパターン「ブルーフルーテッド」だ。この国では、ブルーフルーテッドプレインは文化的遺産の一部とみなされ、デンマークのすべての人々につながる特別な何かがあると信じられているという。そしてデンマークの家庭には、代々受け継がれてきたブルーフルーテッドプレインの陶磁器が必ずあるそう。2世紀以上にわたって2,000種類近くの陶磁器を生み出した王国のアーティストたち。そのブルーは最後の筆まで、ゆるぎないハンドペイントで時を満たしていく。また、中庭にある ROYAL SMUSHI CAFE（ロイヤル・スミシ・カフェ）もすてきだ。日本のお寿司からインスピレーションを受けたという、ひと口オープンサンド。もちろん食器はすべて ROYAL COPENHAGEN。ここでは、時間は少し止まっている。

そして、デンマークといえば、LEGO（レゴ）。1934年に「よく遊ぶ」を意味するデンマーク語「Leg Godt」から名づけられた造語で、ラテン語では「組み立てる」という意味を持つという。世界中で愛されるブロック玩具。その旗艦店がここにある以上、訪れないわけにはいかない。もともと家具店で農家向けの家具をつくられていた創業者が、世界恐慌を乗り越えるためにミニチュアのはしごやアイロン台をつくったことが、おもちゃづくりのきっかけとなった。やがて木製のひきまわして遊ぶ玩具や、自動車やトラックをつくり始める。その後、LEGOブロックを生み出し、大きな成長を遂げていく。ブロック遊びは頭を使うし、創造力を刺激してくれる。子どもたちにとっては、夢の贈り物だ。わくわくして、店内に入る。有名キャラクターとのコラボ商品、LEGOブロック詰め放題、大きなおもちゃから小さなキーホルダーまで。大好きだった電車や、消防車、そしてダースベイダーも、全部LEGOがお出迎え！さらに超大型のモデルや、壁の装飾までもがLEGOブロック。とにかくLEGO天国。カラフルな笑顔をつくり続けるLEGOブロックは、想像力が無限だということを、改めて教えてくれる。





# Copenhagen



## 新しい港から、次の100年を願う

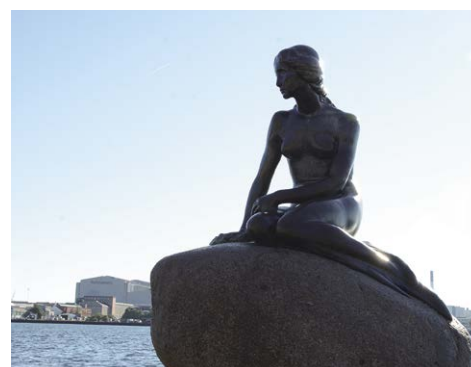
ストロイエからクリスチャンボー城に戻り、水上バスに乗って、コペンハーゲンのアイコンともいべきニューハウへ。かつての船員街で、運河沿いに18世紀につくられたカラフルな建物が並ぶニューハウは、アンデルセンが愛した港町。童話作家としてデビューした頃と晩年を、ここニューハウ67番地で過ごし、運河沿いには今も、アンデルセンが暮らした赤い家が残っている。現在は、“港町”というよりも、オープンカフェやレストランの並ぶ観光スポットだが、200年の時を超えるには必要な変化だったのかもしれない。

さらに足をのばして、かつて、“商人の港”コペンハーゲンを守るためにつくられた星形の要塞カステレットに寄る。星の散歩道を一周しながら、聖アルバニ教会や赤い風車、緑と海の景色を眺めていると、まるで、数百年が数秒のうちに過ぎ去っていくような錯覚にとらわれる。アンデルセンの人魚姫からアメリカンボー宮殿まで、この国の歴史とともにずっとこの景色が平和に守られてきたことこそが、人びとの意志であり、幸福な奇跡なのだ。

日も落ち始めたので、最後にストロイエの先、ラウンドタワーに戻って街を眺めよう。ストロイエのす

ぐ近くにそびえ立つラウンドタワーは、高さ約35mの見張り塔。内部は展望台になっており、地上入り口から約7回転半、距離にして200m強を歩いて登ると、そこからはコペンハーゲンの美しい街並みを360度一望することができる。美しい景色だ。そして、この景色が守られたのには、理由がある。市街地では、建築物の撤去が容易に許されず、建て替える時にも、市庁舎の塔(105.6m)より高い建物は条例によって建てられない。独特の重量感ある街並みは、多くの挫折と、それを繰り返すまいとし

た市民との知恵の結晶なのだ。挫折の一つが、19世紀の初め、ナポレオン戦争の際にフランスに加担し、英国軍によって街が破壊されたこと。そして知恵は、第二次世界大戦の時、ナチスドイツに形の上で降伏し、街を戦火から守ったことだ。重厚な石造りの建物や、カラフルな木造家屋、モダンな近代建築が絶妙なバランスをとっている街並みは、おとぎの国のように星空の下で瞬いている。しかし、その瞬きを永遠に導くのは、今を生きる人びとの営みでしかないのだと思う。



## Sustainable Journey

環境意識の高いデンマークは自転車大国。100人あたり78台を所有し、首都コペンハーゲンでは、40%近くの市民が毎日電車や車の代わりに自転車で通勤している

旅で見つける、それぞれの明日とそれぞれの幸せ

## サステナブルな「自分」と「社会」のデザインを知る

世界も日本も、大きく変わっています。しかも、想像できないようなスピードで。そして、それは当たり前のように、私たちの毎日にも大きな影響を与え始めています。そもそも人生100年時代といわれる中、私たちの未来も、これまでのように、学校に行って、就職をして、リタイア後は趣味に悠々……という枠組みだけでは捉えられなくなっています。いろいろな生き方の準備が必要になってきます。だからこそ、その都度何かを学び、自分自身を知ったり、探究したりすることが、大事です。そして、視点を変えたい時、世界を広げたい時、未来の自分に必要なスキルや、生きる賢さだったり、糧になるのが「旅」なのです。旅で得られるものはいつだって多いし、旅自体も新しい人生の起点になるのです。そして、そんな「未来のための学ぶ旅」をつくりだしているのが、H.I.S.の川本さんです。

「私たちは様々な交流や体験を通して、学ぶ旅をつくっていますが、特に世界における社会環境の変化が目まぐるしいため、学びのテーマや訪問先も毎回異なり、“変わり続ける旅”になっています。旅は、

短い期間で様々な情報に触れ、五感をフルに使って体験することができるので、新しい視点やアイデアをもたらし、自分づくりのヒントを教えてください。もちろん、そのライフステージに必要な学びを一人で学ぶのも良いのですが、複数の人と学びあうことで、様々な視点が加わり、より立体的な旅になる。それがこの『スタディツアー』の魅力だと思います」

### 北欧の暮らしで見つける幸福のそれぞれのカタチ

現地人と対話する。街を感じる。社会を体感する。考える。そして、自分の中に生まれたものを言葉にして、誰かと分かち合う。滞在中にそれを繰り返すことで、いつの間にか、これまでの暮らしの在り方や人生観までも、ゆさぶられてしまう。それでは、スタディツアーに参加すると何が変わり、何が始まるのだろうか？ 実際の旅を通して、その答えを聞いてみる。「北欧に行くスタディツアーにおいて、考えさせられ

るのは、幸福にもそれぞれのカタチがあり、尊重されていること。北欧諸国が、国民幸福度ランキングにおいて常に上位にいる理由は、人や街や建物など、街歩きだけで感じることが出来ます。例えば、世界一非常識な場が挑む人類の一大実験ともうたわれるデンマーク・クリスチャニア自治区は、幸せであるためのシンプルルールを自分たちで決め、コペンハーゲン市と共存しています。特定の誰かが幸せな地域をつくるのではなく、自分たちの幸福感を追求しつつ、対話でもって皆でつくっていく意識やそのプロセスが新鮮に感じます。デンマークだけでなく、近隣諸国も国家レベルで、誰もが幸せになるために、スピードをもって、壮大な社会実験を行っています。トライ&エラーが許容できる国民は、国家や属する地域との信頼関係があるからかもしれません。一方で、今の彼らがあるのは日本文化の影響もあったのではと思うことがあります。デンマークにはデザイン博物館があり、昨年国交150周年を迎え日本展が開催され、日本文化からの影響を受けた作品が展示されていました。例えば、ROYAL COPENHAGEN (ロイヤル・コペンハーゲン) のデ





デンマークを代表する建築ユニット、シュミット・ハマー & ラッセンが設計した王立図書館 (Det Kongelige Bibliotek) で、1999年新館として開館。南アフリカ産の黒色花崗岩を外壁に用い「宝石箱」をイメージさせるモダンな新館は、“ブラック・ダイヤモンド”と呼ばれている。北欧最大の蔵書数を誇り、アンデルセンの直筆原稿や、王室関連の貴重な資料が保管されている。船に乗って運河から見るブラック・ダイヤモンドは、黒く幻想的にきらめき、建物の中央のガラスには、空や雲や運河の水面が映り、海から眺めるだけで価値がある

ヘルシンギョアにある文化複合施設 子ども目線の図書館で有名



世界的に有名な建築家ジャルケ・インゲルス氏が手がけた高齢者福祉施設

デザインは唐草模様で、古伊万里から影響を受けたのではないかという説は有名です。また、自然と共存した日本建築や庭園、ちょうちんのような証明器具など、光と風をうまく取り入れた暮らしは、今は北欧諸国の自然と融合した暮らしを代表するものになっている。そこから考えると、東洋と西洋の幸福感は違えど、私たちが北欧諸国の社会制度や幸福度の高い暮らしを学んでいる状況は、150年前と今で立場が逆転していることに気づく。昔日本が当たり前を持っていた感覚を、今度は日本人が学んで取り戻す番なのかもしれませんね」

## 変化に対しての柔軟性とマイナスをプラスに変えるデザインの魅力

デンマークの考え方を象徴する一つのエリアがある。そこにはブラック・ダイヤモンドと呼ばれている王立図書館や有名な運河があるのだが、そのあたりはもともと工業地帯で、1990年前後、酸性雨などの公害問題にさらされていた。しかし近年、コペンハー

ゲン市は工場をそのままつぶすのではなく、付加価値をつけて住居として再生する道を選んだ。それも工場のサイロなどを残したままで、サイロは2つ並んでいて、それをデザインの力でユニークな魅力に変え、マンションにしたのだ。そして、そこにスポーツ選手やアーティストが住み始めたことで、さらに人気が出ているという。あるものを、あるいは、マイナスのものさえ、デザインの力で変えてしまう。「変化に対して柔軟であることが、サステナビリティには欠かせないのかもしれない。でも、デンマークの建築でも、全部が素晴らしいわけではありません。フレーム造りやデザイン、発想は良いのですが、細部を見るとやっぱり日本の方が素晴らしいこともたくさんある。ですから、彼らのフレームのデザインの部分と、あとは日本人のディテールの上手な部分をうまく掛け合わせてコラボレーションすれば、世界のいろんなところで役に立つんじゃないかなと思っています」デンマークの生活は、さすがに国民幸福度ランキング上位だけあり、いたって充実している。16時ぐらいには帰宅ラッシュが始まり、自転車専用道路が、昔の北京のように、帰宅ラッシュで埋まる。デンマークは法律により労働時間が週37時間なので、

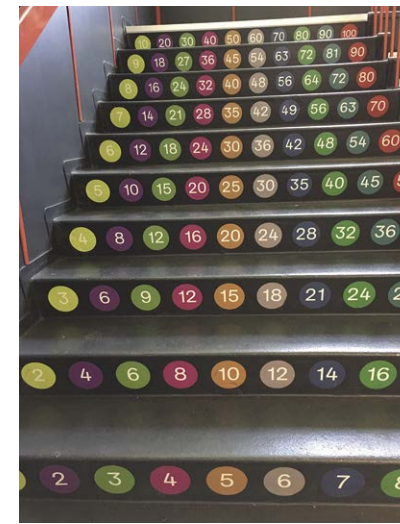
金曜日の午後が大体オフ。学び直しもできるし、家族に使う時間もたっぷりあるのだ。そして何より気になる食生活はどうなのだろう。

## ともに旅することで人と街と未来をつなげていく

「スーパーでもローカルのもが多く、レストランも含めてオーガニック商品がかなり広がっています。既にグリーン競争が始まっていて、有機やトレーサビリティの何らかの認証がないと買わない人も多い。EUはもちろん、デンマークにも独自の基準があって、そういったものが陳列の中心にあり、店側の意識の高さも感じます。もちろん、買う側の意識も高いので、そのような店を選ぶ方が必然的に多くなります。レストランのシェフも、自分でちゃんと土がついた野菜を見て、食べてみないと店の一料理として出せないというし、MSCなどサステナブル・シーフードのラベルがついているものが選ばれていますね。これからデンマークにいらっしゃる方がいるのなら、勇気を出して、人々の暮らしを垣間見てみるのも良い。デンマーク人は本当に親切で、一つ質問をしたら3つ



1歳から入ることのできるキンダーガーデン(幼稚園のようなもの)が充実。個性を尊重する教育を目指している



デザインによる視覚教育効果のある学校設備



意識の高い消費者のため、食品の安全性に関する様々な認証マークつきの商品が並ぶ



自転車専用道路など環境インフラが充実。いくつかの自転車専用高速道路も開通



ユニバーサルデザインが徹底された公共交通機関

ぐらい返ってきます。だから、気軽に話してみても、その人が教えてくれるところへ行ってみるのが一番良いかなと。ブラックダイヤモンドにも、誰もが自由に語り合えるスペースがあるし、昼間に行くくと大学生たちがグループワークで活発に話し合っています。あとは、インフラ、公共交通機関には乗ってほしいですよ。バイオ燃料を導入しているバスが、デンマークではプラスのマークがついて走っていて、何しろデザインが良いので見るだけでも楽しいです。空港から市内までの電車も、自転車を積めて乗れるし、車内にはフェアトレードのコーヒーマシンがあったりする。一つひとつを見ているだけで新鮮ですね。ただ、車両によっては階段があったりして全然バリアフリーではなくて、少し雑だったりする。細かいところを見ていくと、やっぱり日本の良いところにも気づかされることがあります。賞賛するためのツアーではまったくなく、ある意味、日本や自分のことを知ったりというような機会にもなると思います」この秋も川本さんはデンマークにいて、何組かのスタディーツアーをアattendしている。その時に、コペンハーゲンにいる過去の参加者の方を、夕食にお招きして話を聞くことが、大きな喜びだそうだ。「1年前に私のプログラムに来てもらった人であれば、

1年前の自分に視点を戻すことでいろんなものが見えてくる。そして、旅をともにした同士、影響を与え合い、またつながっていく。デンマークと人をつなぐだけじゃなくて。結局、人同士もつながったり、デン

マーク人もそうだし、いろんな人をつなげる。それがこの旅の最大の醍醐味だと思います」そう、サステナブルな未来をつくるには、やっぱり、旅のチカラが必要だ。

## H.I.S.のスタディーツアーとは？



世界各地の社会課題を解決するために、現地の交流プログラムに参加し、自らの考えを深めていく。得がたい海外体験を旅というカタチにしたものが「学びの旅、スタディーツアー」です。特徴は旅だけでなく、旅の前後までがプログラムになっていること。出発前事前学習、旅行中の様々な体験、そして帰国後の報告会や同窓会まで、旅の前・中・後にいたる一連の流れがパッケージ化され、“学び”の機会を多角的に提示しています。参加者は学生からビジネスマンの方まで、年齢、職業も多岐にわたり、社会課題の解決に取り組む人材の輩出にもつながっています。

## 川本 幸子

株式会社エイチ・アイ・エス  
法人旅行営業本部  
関東法人営業グループ



## 問い合わせ先

株式会社エイチ・アイ・エス  
法人旅行営業本部 スタディーツアー営業所  
TEL : 03-6836-2551 FAX : 03-5360-4733  
〒151-0051  
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-33-8 サウスゲート新宿ビル1階  
<https://eco.his-j.com/volunteer/>



## Vol.2 ヴィレット貯水池の屋外プールの巻



### パリの夏の風物詩といえど

今年のパリは7月、8月と30度を大きく超える猛暑日が続いた。パリの夏といえば、Paris-Plages (パリ・プラージュ)。2002年に前任ベルトラン・ドラノエ市長のもとで始まり、セヌ川岸に砂を敷き詰めた人工ビーチが一躍話題になって早16年。サルサやヨガのアトリエに子どもの遊具、レストラン・バーなど、年々充実度が上がっている。パリ市庁舎やノートルダム寺院のある中心部のセヌ川岸から始まったParis-Plagesは、2007年からサンマルタン運河北側の貯水池 Bassin de la Villette (バッサン・ドゥ・ラ・ヴィレット) の両岸でも開催されるようになった。レジュブリック広場近くから流れるサン・マルタン運河は、地下鉄2号線ジョレス駅とスターリングラード駅間の高架で地下をくぐった向こう側から名称がBassin de la Villetteに変わり、さらにその北側の郊外にある源流、ウルク運河へとつながっていく。貯水池の両岸には映画館や児童公園、ベタンク広場やレストラン・カフェが並び、普段から周辺の19区住民の憩いの場となっているが、7月7日から9月2日までの期間中は、子どもが遊ぶ企画が満載だ。運河の両岸を横断するターザンロープやドライイミストのエリア、カヤックにベビーフットなど20以上の無料アクティビティが提供されている。

### 19区の運河がプールに变身



そんなBassin de la Villette内に、昨年7月から登場した遊泳用プール。貯水池のQuai de la Loire (ケ・ドゥ・ラ・ロワール) 側の岸沿いを幅16m、全長100mで囲んだ中に、水深40cmから2mまで4種類のプールを設営し、子どもから大人まで楽しむことができる。サン・マルタン運河の

すぐ近くに住んでいる筆者は、ピクニック客で賑わい、遊覧船が行き交う運河の水面に浮かぶゴミの数々を常日頃から目にしている。また2年前に水抜きされた運河の底の光景も衝撃(?)で、このプールを一見した時は「あの水で泳いで、本当に大丈夫か...?」ととっさに思ってしまったのが正直なところだ。

しかしそんな心配をよそに、Bassin de la Villetteの新しいBaignade (ベナード/遊泳場)は、近隣の子連れファミリーや若いカップルがタオルを肩から下げ、浮き輪を持って長い行列をつくるようになった。そして今年も第二弾となる遊泳場が6月30日からオープンした。



### フィルターだけで浄水

実際には「運河の水を全部抜く」ことで、またその後もクリーニング大作戦を遂行し、水質向上に大きく効果が出ているというBassin de la Villette。プール内の水は環境保護のため塩素などの化学薬品を一切使用せず、フィルターでゴミや汚れをろ過しているのみ。その水質は、2007年に制定されたフランスの衛生基準に基づき、1日に2~4回検査するなど厳格に管理されている。ちなみに「基準値を下回った場合は直ちにプールを閉鎖する」そうだ。プール内の定員は500人で、1日の利用者は2,300人までに限定。それでも入り口には常に数十mの行列ができていて、中にはもちろんシャワーや脱衣場、デッキチェアの置かれたスペースもあり、設備はすべてバリアフリー仕様。また26人の監視員が常駐し、子どもから大人まで全利用者の安全を確認している。4歳と6歳の息子を連れて行ったというフランス人パパの友人に話を聞いてみると、「入るまでに1時間並んだよ。子どもたちは喜んでたし、実際に泳いでみて水質も別に気にならなかった。でも、あんなに待つとは知らなかった」とのことで、プール自体にはなかなか満足だった様子。確かに、夏休みに入っても親の仕事の都合などでパリを脱出できない子どもたちにとって、自然の水を使った無料の屋外プールは最高の遊び場だ。



地球環境や公正さ、社会貢献を意識し、人体にもやさしく心地良い製品やサービスを提供したい。そんな新しいアイデアを形にする会社や集団、あるいは個人の活動が、パリには今日もたくさん生まれています。このコラムでは、ジャンルを問わず様々なレポートを通して、これから(DORÉNAVANT)の時代の兆候を感じられるライフスタイル情報を発信していきます!

### 'Nager à Paris' パリ遊泳計画

実は、海のないパリの夏を盛り上げる自然水プール化計画は、来年以降もさらに拡大していく予定だ。

「Bassin de la Villetteは第一段階で、次は2019年に12区のヴァンセンヌの森にあるドゥーメル湖。そしてオリンピック開催の2024年以降には、セヌ川全体が遊泳可能になることを目指す」とパリ市のスポーツ担当者はコメントしている。これはライン川の浄化に成功したスイスのバーゼル市をモデルとしていて、パリ市も水質改善のための予算は惜しまないようだ。バーゼル市民は平日仕事の後で水着に着替え、衣類を完全防水の袋に詰めて川を泳いで帰宅することも珍しくないのだとか。10年後にはセヌ川でも、定時を過ぎると泳いで帰宅するパリっ子たちの姿が見られるようになるのだろうか?

それにしても、2024年開催予定のオリンピックを、セヌ川の水質を改善し自然の中の公共スポーツ施設を増やす機会にする。アンヌ・イダルゴ市長の指揮のもと、オリンピックのめたらす成果を市民と環境問題に還元しようとするパリ市の取り組みが、とても印象深く思えるのは筆者だけでしょうか。



### Baignade dans le Bassin de la Villette

ヴィレット貯水池の遊泳場

27 Quai de la Loire 75019 Paris  
2018年6月20日~9月9日 11時~21時 入場無料



#### Profile

**タナカアツコ**  
2003年よりパリ在住。語学留学を経てフリーランスのライター、コーディネーター業に携わる。現在は日本の食や日本酒をPRする会社のスタッフとして、広報業務やイベント運営にも従事。

世界の素敵な街や会社、商品やサービスの魅力を、独自取材でお伝えします。

皆様の、「知りたい!」と一緒に探しにいく新しいソーシャルメディアです。



<http://sus-com.net>

掲載中、掲載予定の会社、モノ、コト

- よりエコに、サステナブルに生まれ変わるパリの街 (フランス)
- 空飛ぶバスが生まれるバラ色の街 エアバス (フランス)
- 500年の眠りからモナ・リザを呼び覚ます光の魔法 (フランス)
- ユニクロ、味の素のソーシャルビジネス (バングラディッシュ、ガーナ)
- 世界の健康に挑む、タニタ食堂 (日本)
- 世界最大級ヘルス&ウェルネス企業のサステナビリティ ウォルグリーン・ブーツ・アライアンス (イギリス)



株式会社サステナビリティ・コミュニケーション・ハブ

## BONZOUR BOUTIQUE

ボンズール・ブティックではフランスから輸入したアイテムを中心に様々な商品を取り揃えてみなさまのご来店お待ちしております。



Webshop

<http://bonzour.stores.jp>

今年も出店します!

## Festival de Paris à ENDOJI

円頓寺秋のパリ祭

11.10(Sat) - 11(Sun)

11:00 ~ 18:00

円頓寺商店街: 愛知県名古屋市区那古野1丁目

公式サイト: <http://endoji-paris.net>

BONZOUR はイベント限定スペシャル価格で出店予定!  
情緒ある城下町の円頓寺商店街で毎年大人気のイベント! フランスの雰囲気たっぷりなブースがたくさん。ぜひ遊びに来てください!

もっと感動しよう観る旅から感動する旅に!



キッチン付きアパートマンホテルと  
珠玉のプチホテル in

<パリ+フランス+ヨーロッパ>

Unique collection of apartment hotels & charming, luxury, renowned designers boutique hotels in Paris, France and Europe.



l'essentiel pour vos besoins de voyage depuis 1985

<http://www.imahotels.jp>  
お申込  
お問合せは  
0120-489-060

essential for your travel needs since 1985

IMA HOTELS

# SHIPPO-YA

9/1(土) NEW OPEN!

【ユーロスクーターブティック】

## SHIPPO-YA

今年で  
**20周年**を  
迎えました!

〒487-0016  
愛知県春日井市高蔵寺町北2丁目124

☎ (0568) 52-6051 <http://www.shippo-ya.com/>

OPEN: 10:00 ~ 19:00 (日・祝は 18:00 まで)

CLOSE: 毎週月曜日、第2・4火曜日  
(営業することもありますので、お気軽にお問い合わせください)

SHINICHIRO ARAKAWA @ *Max Fritz*



Table with multiple columns listing cafe and restaurant names, addresses, and phone numbers across various Japanese cities like札幌, 仙台, 福岡, etc.